

平成22年06月06日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520593

研究課題名（和文）金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究

研究課題名（英文）A Synthetic Study about Simokoubenosyou(下河辺庄), which is the Kanesawahozyou(金沢北条) family' s fief.

研究代表者

永井 晋 (NAGAI SUSUMU)

研究者番号：00443408

研究成果の概要（和文）：

中世に下総国下河辺庄という広域荘園が形成された地域について、各分野の研究者や自治体の文化財担当者と意見交換を行い、現地での確認調査・聞き取り調査を行った結果、鎌倉時代に地頭として下河辺庄を治めた金沢氏が河辺・新方・野方と三地域に分割した経営形態が地域の実情に即した適切な統治の形態であったことを確認することができた。

すなわち、下河辺庄は荒川・利根川・大井川（太日川）の三本の河川が集まる水上交通の要衝という物資輸送の利便性を持つが、それは同時に、肥沃な土壤が継続的な供給される生産性の高い水田地帯という経済的優位性と水害に弱い洪水常習地帯という豊凶の落差の激しい中下流部の低地帯（新方・河辺）と、鎌倉街道中道の通る猿島台地・下総台地上の耕地帯に大きく分かれていることが明らかになった。金沢氏は、一律の基準で支配できない広域荘園に対し、本家が直轄する所領と一族や被官を郷村の地頭代（給主）に補任して治める所領に細分化し、それらを公文所が統合することで全体の管理を行っていた。

本科研では、下河辺庄の成立過程を探るために、撰津源氏の東国進出と秀郷流藤原氏下河辺氏の成立に始まり、江戸時代に語られていた下河辺庄の記憶で調査年代を終えることにした。

成立期の下河辺庄は秀郷流の本家小山氏との関係を重視したので野方の大野郷に拠点があったと推定される。下河辺庄の地頭が下河辺氏から金沢氏に交代すると、金沢氏は鎌倉の館に置かれた公文所が直轄して管理する体制をつくったので、下河辺庄は鎌倉の都市経済に組み込まれた。この時期に、下河辺庄赤岩郷は鎌倉に物資を輸送する集積地として発展を始めたと考えられる。南北朝時代になると、下河辺庄赤岩郷は金沢家の菩提寺称名寺の所領として残されたので、称名寺が任命した代官や現地側の担当者と称名寺がやりとりする書状や書類が多く残されるようになった。また、称名寺のリスク管理の中で年貢代銭納が行われ、上赤岩には年貢として納入するために保管されていた出土銭が発掘されている。

享徳の乱によって古河公方が成立すると、下河辺庄は古河公方側の勢力圏の最前線となり、築田氏や戸張氏といった公方側の武家が庄域を管理し、扇谷上杉側の岩槻大田氏と境界を接するようになる。この時期に、称名寺と赤岩郷の関係が確認されなくなる。

江戸時代になると、下河辺庄新方は武蔵国に編入され、新方領とよばれるようになる。この地域は『新編武蔵国風土記稿』や『武蔵国郡村誌』といった詳細な地誌が残るので、地域で語られていた下河辺庄の記憶を知ることができる。

本科研は、歴史学を中心とした地域総合研究として、荘園史の枠組みを超えた地域研究を行おうとしている。調査の編目は、後述する報告書掲載論文から明らかになるし、調査の詳細は報告書の本文をご覧ください。

研究成果の概要（英文）：

This survey is a comprehensive regional research of the extensive private estate in the

Kanto plain, Shimousanokuni-Shimokoubenoshou (下総国下河辺庄) made by exchanging opinions with the personnel from the local government responsible for the cultural assets and the researchers from different fields and by conducting field studies. Shimokoubenoshou is a key junction of river traffic where Ara-river (荒川), Tone-river (利根川) and Hutoi-river (太日川) meet. The southern central area has bountiful soil while its rice paddy zone is vulnerable to floods, and the northern area is dry field farming area spread over Sashima-plateau (猿島台地) and Shimousa-plateau (下総台地). Although they were connected by the rivers, their environments were quite different between the north and the south.

The Shimokoube family (下河辺氏), the land lord and the developer, set up a base in Oonogou (大野郷) in Nogata (野方) because of their connection with the Oyama family (小山), the head family of the descent. The Kaneshawa family (金沢), who became the land lord in the middle of Kamakura Period, directly ruled by residing in the house of Kamakura, and Akaiwagou (赤岩郷) was developed as a place where goods sent to Kamakura were collected. Until the Kogakubou (古河公方) family was formed by the turmoil of Kyoutoku war (享徳の乱), Shimokoubenoshou had belonged to the economic sphere of Kamakura.

In Edo Period, Shimokoubenoshou-Niikata (下河辺庄新方) was incorporated into Musashinokuni (武蔵国), so it was recorded in topographies such as “Shinpen Musashi Fudokikou (『新編武蔵国風土記稿』)” (new edition of Musashinokuni gazetteer).

Please refer to the report for the details of this survey.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：

キーワード：下総国下河辺庄、金沢北条氏、地域総合研究、経済史、交通史、喫茶文化史

1. 研究開始当初の背景

下河辺庄は、南端を埼玉県三郷市とし、北端を茨城県古河市とする南北80キロに及ぶ、南北に長い広域荘園である。中世には、荒川(元荒川)・利根川(中川水系)・太日川(常

陸川水系の分流)と三本の大河川が荘内と境界線を流れていた。このことが、鎌倉への物資輸送の大きな利点となり、下河辺庄が鎌倉の都市経済に組み込まれる大きな要因となった。

下河辺庄の全体像を把握するためには、京都・鎌倉の政治史や経済史の動向を含めた広域的な視野と地域の変遷を丹念にたどる地道な現地調査を併せて行う必要があり、かつ都道府県を単位として形成する地方史の境界を越えた地域研究を行う必要があるという点で、広域的な地域総合研究という視座が必要となってくる。現状においては、中央の研究者は自分の関心のあるテーマに限定してデータを収集するつまみ食いの関わり方をし、地方の研究者は庄域が埼玉・千葉・茨城の三県に分断されたことで、下河辺庄の一部地域についてそれぞれの地域の地方史として関わるといった分断的な研究が行われてきた。そのため、環境の異なる中南部の河辺・新方と北部の野方では、まったく異なる荘園のイメージが形成されていた。

物流・交通を扱う経済史や河川交通史においても、古河・総和といった茨城県域では常陸川水系に主たる関心があり、東京・埼玉といった中下流域では河川交通と東京湾の会場交通をあわせた物流の研究が行われていた。

また、中世東国における茶の生産をつたえる金沢文庫の古文書群に記された称名寺とその関連の律院の分布と、今日銘茶として知られる猿島茶の分布域が重なることから、中世東国の喫茶文化史も研究の柱に加えた。

本科研が南と北に大きく分断される下河辺という地域について、この分断された状況乗り越えて全体像の構築をめざすものである。

2. 研究の目的

上記の状況を勘案して、本研究は以下のことを実施してきた。

(1) 文献資料の整理

下総国下河辺庄に関する基本文献の整理。金沢北条氏・称名寺が下河辺庄を知行した時期の古文書の大半は神奈川県立金沢文庫が保管するので、金沢文庫保管史料の整理と、関連する地域の自治体史・文化財報告書等に記載された文献を整理してデジタルデータ化した。

(2) 現地調査

赤岩郷（下方）・春日部郷（新方）・大野郷・前林戒光寺跡（野方）を中心とした現状確認調査や聞き取り調査を行い、中世から現代にいたる地形や産業の変化を追跡することで、文献史料に記されている内容をより具体的に解読できるような関連資料の収集をはかった。

(3) 環境史との接点

14世紀の気候変動に関する文献や災害史の資料にあたり、『金沢文庫古

文書』に残る下河辺庄の気候変動や水害の記録、利根川東遷として研究される河川改修と治水の現状確認を行い、下河辺庄周辺地域の災害の実情を把握することにつとめた。

(4) 喫茶文化史

称名寺領赤岩郷の茶という意味で「赤岩茶」とよばれた茶や、下河辺庄野方の律院戒光寺に残る道具から生産可能な茶など、下河辺庄を中心に中世東国の喫茶文化史の分析を行った。

3. 研究の方法

- ・文献資料の精査
- ・未翻刻文書の翻刻と整理
- ・現地調査
- ・関連する分野の産業史との学際的意見交換

4. 研究成果

研究成果報告書の作成

『金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究』（全94頁）

第一部 研究の概要

第二部 論考編

総論

永井晋「下総国下河辺庄に対する総合的な展望」

各論

野口実「摂津源氏と下河辺氏」

永井晋「金沢氏・称名寺と下河辺庄」…

野村朋弘「大覚寺統領としての下河辺庄」

鈴木哲雄「下河辺庄と前林戒光寺」

橋本素子「下河辺庄における喫茶文化」

佐々木清匡「赤岩茶のルーツを求めて—松伏町域における茶の分布と生産・流通の足跡—」

北爪寛之「下河辺庄の交通と合戦」

高梨真行「戦国期下河辺庄域の領主支配と変遷—中世戸張氏との関わりから」

実松幸男「近世後期～幕末期における地域住民の下河辺庄新方の記憶—新方領と新方荘をめぐって—」

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

鈴木哲雄「中世東国の百姓申状—称名寺蔵「万福寺百姓申状」の世界—」(佐藤和彦編『中世の内乱と社会』東京堂出版 2007年)

鈴木哲雄「称名寺領下河辺庄赤岩郷と『ちやうせう書状』」(阿部猛編『中世の支配と民衆』同成社)。

永井晋「鎌倉時代の鳩井氏と鳩ヶ谷」(『郷土はとがや』61号 2008年)

永井晋「中世東国の律院の茶」(『鎌倉』107号 2009年)

〔学会発表〕(計3件)

永井晋「鎌倉時代の鳩ヶ谷」(2007年7月21日 於鳩ヶ谷市郷土資料館 鳩ヶ谷郷土史会主催)

永井晋「鎌倉時代の春日部氏」(2007年9月1日 於春日部市郷土資料館 春日部郷土史研究会主催)

野口実「東国出身僧の在京活動と渡宋・渡元」(2008年12月20日 於早稲田大学)

〔図書〕(計2件)

神奈川県立金沢文庫企画展図録『中世の港湾都市六浦』(2009年)

神奈川県立金沢文庫企画展図録『武家の都鎌倉の茶』(2010年)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計◇件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永井 晋 (NAGAI SUSUMU)

神奈川県立金沢文庫主任学芸員

研究者番号: 00443408

(2) 研究分担者

野口 実 (NOGUCHI MINORU)

研究者番号: 40189317

鈴木哲雄(SUZUKI TETUO)

研究者番号: 20374746

高梨真行(TAKANASHI MASAYUKI)

研究者番号: 60356269

(4) 研究協力者

角田朋彦 (TUNODA TOMOHIKO)

京都造形芸術大学非常勤講師

野村朋弘(NOMURA TOMOHIRO)

京都造形芸術大学非常勤講師

橋本素子(HASIMOTO MOTOKO)

京都造形芸術大学非常勤講師

実松幸男(SANEMATSU YUKIO)

春日部市郷土資料館長

佐々木清匡(SASAKI KIYOMASA)

吉川市役所

北爪寛之(KITAZUME HIROYUKI)

國學院大學大学院博士課程